

熱い息を感じながらディノ子はコクコクと無言で  
頷くしか出来なかった。

ディノの手が下着にかけられ、スルスルと下ろ  
されていく。

「うわ、スツゲ、パンツ系引いてる」

「えええっ!」

ディノ子の秘部とクロッチの間には、キスの後  
互いの唇を繋いでいた糸よりもずっと太く粘着質な  
糸が垂れていた。

その糸を見てディノはニヤと笑うと下着を足首  
から抜き取り、クロッチ部分の内側を見せつける  
ようにディノ子の眼前で広げた。

「ほら、こんなにベトベトになってる」

「ヤ、ヤダッ! そんなの見せないでえ!!」

視界に僅かに入った、カタツムリが這った後みたい  
にヌラヌラした下着に妙な興奮を覚えつつも、そんな  
自分を否定するように拒絶の言葉を吐いた。

「お毛々逆立てながらそんな事言っても説得力ねーぞ」

逆立った陰毛を指先で撫でてやると、ディノ子は  
ハァァと気持ちよさそうに溜息をつく。

ディノはもう一度足を大きく開かせると、牝の

匂いを放つその部分に顔を近付けた。

金色の柔らかそうな陰毛に囲まれたソコは僅かに  
開いており、透明な蜜を滴らせてディノが吸い  
付いてくるのを待っているかのようなだった。

ディノは指で秘部を左右にめいっばい開くと、  
甘酸っぱい匂いに惹かれるように蜜の源泉に舌を  
挿し入れた。

「あああ! 舌、入れちゃだめえ!」

いきなり中を舌で掻き回され、ディノ子は自分の  
足の間で揺れる頭を驚揺みにして引き剥がそうと  
するが、敏感な部分に軟体動物が這い回るような  
感覚に力が入らず、ただ身悶えるばかりだった。

ぢゆる、ずちゅちゅっ、くちゅっ

ディノ子が抵抗出来ずにいるのをいい事に、ディノ  
は下品な音を立てて蜜を吸る。

その音がまたディノ子の羞恥と快楽を掻き立てた。

「ディノ子のオマ×コ、スゲー美味いぜ」

愛液でベトベトになった顔を上げると、ディノは  
口の回りも意地汚く舌で舐め取った。

「もうっ! ディノのバカバカ! ロマにもそんな  
言葉言われた事ないのに! 意地悪! 変態!!」